

なぜ 中国語を 勉強しようと思 ったのか

わたなべこうじ
渡邊幸治

(財)日本国際交流センターシニア・フェロー、
元駐ロシア連邦大使

筆者は昨年の夏約4カ月間、北京大学の夏季特別講習と個人レッスンにより、中国語修得に励んだ。筆者とお世話になった中国の若き博士2人

写真提供：筆者（以下も同じ）



去年の6月初めから10月末まで、中国語の勉強のため、北京に滞在した。当初、齢70を超えて、いまさらなんだという気持ちは、自分でもなかなかぬぐえなかった。また、滞在期間が、日中関係にとって厳しい時期となったこともあり、皆様にご心配をかけた面もあった。しかし、結果的にみれば、行つてよかった。充実した4カ月だったと思う。以下は、その報告を兼ねた雑感である。

20年ぶりの中国語学習

かつて20年前に北京の大使館にいたころ、中国人の家庭教師からレッスンを受けたことがあり、中国語について若干の覚えはあった。しかし、その3年間の学習では、予習、復習、宿題は一切しないという方針を實行していたので、基礎といえるほどのでもなかった。

中国語習得に熱心ではなかった私が、改めて中国語を勉強しようとした少し真面目な理由は、小生にとり最も関心のある、今後の日米中の3国関係のあり方を考えていくため、中国語をやってみよう、すなわち、中国で中国語を学ぶことが中国理解に通じ、朋友山本正氏の(財)日本国際交流センターでの研究の上でも、役に立つかなと思つ

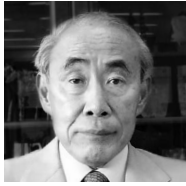
たからでもある。

さらにもうひとつ、外国語を学ぶことのメリットは、若さを保ち、少なくともボケない効果があるという点である。実は20年ほど前に、緒方貞子さんから、「私は10年に一つ、新しい外国語を勉強したい」といわれたと記憶している。これが、今回の北京行きのもう一つの理由でもあった。最近、緒方さんにこの話をしたところ、「あれはそうしたいという願望であつて、残念ながら、実現していませんよ」とのこと。

北京へのソフトランディング

北京で中国語の勉強といつても、事前に周到な調査と準備をして行つたわけではないが、5月に1週間ほど事前の下見をした。宿泊先、家庭教師、大学の夏季学校の模様などを紹介してもらっていたこともあり、6月初め、北京にソフトランディング。

中国では、外国人の滞在は招へい主、つまり受け入れ母体が必要である。私の場合、北京大学国際関係学院が招請主。旧知旧友のO院長、Y副院長のご好意で、北京大学のモダンな同学院の建物の2階にある研究室を使わせてもらった。



わたなべ こうじ ●東京大学卒業後、外務省入省。米国プリンストン大学、ハーバード大学に留学。その後、南ヴェトナム大使館参事官、アメリカ局北米第一課長、駐中華人民共和国大使館公使を歴任。情報調査局長、経済局長、サウジアラビア国駐節特命全権大使、外務審議官、駐イタリア特命全権大使、駐ロシア連邦特命全権大使を経て退官。日本経団連特別顧問、国家公安委員を歴任。1997年より現職。(財)国際文化フォーラム理事長も兼務

G君とK君、この2人の存在なしには、今回の北京留学は考えられない、それほどお世話になり、親しくつき合わせてもらった。

29歳のG君は、北京大学卒業後、早稲田大学・北京大学共同博士課程の第1号。3年間早稲田大学に留学。専攻は、日本政治と国際関係論。日本語、英語にも優れ、去年9月から、国際関係学院の最年少教員である。

21歳の日本人K君は、高校時代の駅伝選手だった。あえて合格した日本の有名大学には進学せず、目標と希望を抱いて北京大学に留学。中国語を学習した1年後、同大学の国際関係学院へ行き、現在2年生。中国語は中国人も驚く北京語。北京大学日本人学生会長をしている。

G君には北京空港到着時から、ホテル、学生登録、家庭教師探し、さらには学生食堂、売店への案内、携帯電話の購入等々、万端の世話をしていた。G君は言葉がからきし通じない私が、北京の生活にソフトウェアインテグレーションの最大の功労者であると同時に、11月までの滞在を通じて、極めてよき話相手だった。

K君の向上心と行動力と顔の広さ、

それを支える中国語には、本当に感心した。彼のおかげで、中国のマスコミに引つ張り出され、彼が通訳してくれるということが再三あった。しかし、なんとといっても、彼との食事の回数が最も多かったことに感謝したい。中国料理を一人で食べるのはまことに味気ないもので、必然的に彼に声をかけることが多かった。

各国の若者と受けた夏期講習

北京到着が5月30日、4週間の夏期特別講習の開始が6月末。それまでの間、G君の尽力で、2人の個人教師にお願いし、それぞれ、週2回、1回2時間ずつレッスンを受けた。一人が初級中国語教育のベテラン中国人女性で、文字通り「你好」から、教えてもらった。もう1人がG君のルームメイトのL君で、2人で「人民日報」の記事を読むということにした。ちなみに、L君は、6月末には政治学博士になり、故郷雲南省の共産党書記局に就職。

6月26日午前、夏季講習の「分班考試」というクラス分けのテストがあり、受験した。総数170名すべて外国人、3時間のテストだった。結果が悪いと恥だと思い、一カ月の学習を思い起こ

し、鉛筆もなく、カッカして解答用紙に答案を記入した。

午後に結果が発表になり、思いがけなく、全部で7クラス中、第4クラス、つまり、準中級のクラスということになった。正直、うれしかった。

翌6月27日、第4クラスの授業が始され、クラスメートは16名、半数が韓国語学院の2年生、3分の1が米国、カナダの華僑の子弟でやはり大学生。あと、フランスとスペインの女子大学生。もう1人が米国に留学中で、夏休みを利用して中国語を勉強するという感心な日本人女子高校生。クラスの平均年齢は、私を外して多分19歳だろう。

71歳の元日本外交官がそこで直面したのは、このクラスの水準は、自身の実力よりはるかに上だったことだ。多分、漢字が読めたということ、マルバツ試験の運がよく、「考試」の成績が良過ぎたのだ。大体、クラスの先生は中国語以外は話さないもので、ついていくのが著しく困難であった。

かくて、月曜から金曜まで毎日、午前8時から12時まで、口語と文章の中国語を2時間ずつ、さらに毎回、復習、宿題、予習が期待されるという苦難の日々となった。

わが友、G君にこの窮状を伝えたら、彼曰く「分班考試で張り切ると、あとで後悔しますよと話しておくべきでしたね」。そんなこと、あとになつていわれても時すでに遅く、^{シツ}辛苦、^{シツ}辛苦の4週間だった。

中国の若者たちの対日感情

今年3月、北京留学を思い立ったころはまだ日中関係が悪くなる、ないしは、すでに悪くなつているとは考えなかつた。むしろ、米国と中国の関係が悪くなるのではないかと思つてた。それが4月には、北京、上海で反日暴動が起き、日中関係の雰囲気は国交正常化以来、最悪の状態といわれるにたつてゐる。

中国語の勉強とはいえ、当然、日中関係について考えざるをえなかつたし、また大学の教授、学生ともつと突つ込んだ話し合いをしたいとの思いは強かつたが、言葉の問題と雰囲気からいつでも慎重にならざるをえなかつた。

しかし、それでもいくつかの点を指摘できると思う。まず、4カ月の滞在を通じて、私自身個人としては、具体的に不愉快な思いをしたことは一切なく、充実した北京滞在であった。

5月に下見のため、北京に行き1週間滞在した。4月の暴動から日も浅く、反日デモの再発が心配された時点だったが、個人として不快な経験は一切なかつたとG君に謝意を込めて話したのに対して、彼は、「実は僕たちも心配してゐました。それを聞いて、大変にうれしく、安心しました」と述べた。ただ、その彼が言葉をついで言うには、「ただ、中国人は老人を敬いますからね」。これが冗談だったのか、本音だったのか、今でも関心のあるところである。

学生の意識の中にある対日感情には、厳しいものがあるのは否定できないようだ。6月の中旬、新任のO学院長が、日米中関係について講演、初の公開講義ということもあり、大教室は満員。残念ながら講演の内容についてのG君のウイスパリングも、周りへの気兼ねで効果的でなかつた。ただ、講演のあとの学生からの質問と学生の反応には衝撃を受けた。

最前列にいた学生の質問は、「なぜ、中国政府は、公式に日本の国連安保常任理事国入りに反対するといわないのか、理解できない」というものであり、これに対して、大きな拍手。その晩で唯一の拍手が起きたのだ。



毎日、午前8時から12時までの4時間、教室で口語と文章の授業を受けた



北京大學で4週間ともに中国語を学んだ仲間たちと記念撮影

○院長の回答は、外交には曖昧なことが必要なこともあるものだというものだった。4月の日本大使館に対するデモの起点は、北京大学もある北京市海淀区ハイディン中関村ジョンクワン(中国のシリコンバレーといわれる)だったことを改めて想起した。

二つの歴史の問題

北京で考えたことは、日中間には、二つの歴史問題があるということだ。一つは、1945年にいたる日本の歴史、すなわち中国を侵略し、多大な苦痛と損害を与えたという歴史。その

抗日戦争の歴史が愛国主義教育によって、中国の若者の意識の中に、潜在的な日本への反発となつていているという事実がある。

靖国神社参拝問題への中国人の反発の背景をなしている歴史であり、また、わが国の若者が、戦後の教育で、十分学んでない部分である。日本人としてもう一度振り返って、この歴史の事実を厳粛に受け止めるべきものと思う。

しかしながら、日中間には、もう一つの歴史問題が存在すると思う。それは中国人には、1945年以降の日本の歩み、生きざま、端的にいつて、日本が戦後いかに変わったかという点をほとんど知らないという、歴史認識の問題である。

最近の中国の世論調査によると、多くの中国人が日本について連想することは、南京虐殺と軍国主義だということ。南京虐殺は規模の問題はともかく、事実として否定し得ないが、そこから直ちに軍国主義を連想するということは、戦後の日本の歩み、とくに平和憲法、非核3原則といった平和と民主主義を奉じて、戦後の廃墟から立ち上がってきた日本国民の生きざまを捨象して、い

4カ月の中国語学習の効果

日本での夏休みのあと、9月、10月と北京大學に戻り、数人の個人教師による中国語の学習を続けた。しかし、北朝鮮に関する6者協議、日本の総選挙、小泉総理の靖国参拝問題で、中央電視台の英文テレビ(英語放送)とか、雑誌のインタビュー、さらには日中関係とマスコミの役割と題するインターネット座談会への出席。いずれもG博士かK君とともに引っぱり出され、二つの歴史問題論をはじめ、私なりに日本の立場を説くように努めた。

また、北京大學の日本問題研究会や社会科学院日本研究所での講演。さらには、米国出張などもあり、その結果、中国語の予習、復習はできず、夏季講習と比べれば、手抜きとなつてしまった。

私の中国語であるが、当初、4カ月もすればテレビのニュースがわかり、対談ぐらいはできるだろうという夢を描いていたが、結果はほど遠かった。しかし、中国全土から俊秀の集まる北京大學のキャンパスで、若き男女学生と朝に夕にすれ違い、中国語の学習で苦勞したことは、若さとはかく老化防止の効果は確かにあつたように思う。☺